



Title	古代日本語の活格性にまつわる記述的研究：ミ語法と格標示の考察
Author(s)	竹内， 史郎
Citation	大阪大学， 2008， 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49129">https://hdl.handle.net/11094/49129</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	たけ うち し ろう 竹 内 史 郎
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 1 6 9 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	古代日本語の活格性にまつわる記述的研究 ——ミ語法と格標示の考察——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 蜂 矢 真 郷  (副査) 教 授 金 水 敏 准教授 岡 島 昭 浩

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、上代を中心とするミ語法について国語学的に考察し、そして、その問題点から古代日本語の格標示体系が活格性である可能性について考えるものである。

序論、第一部「ミ語法の考察」、第二部「格標示の考察」、結語からなり、末尾に「用例出典および調査文献」「参考文献」等を示す(400字詰換算約395枚)。第一部は、第一章「議論上の前提とミ語法研究史概観」、第二章「ミ語法の構文的意味——「形容詞語幹+ム」型四段動詞との比較——」、第三章「ミ語法と「形容詞語幹+ム」型四段動詞の歴史的関係」、第四章「ミ語法について——「形容詞語幹+ミ」の位置づけ——」、第五章「ミ語法の本態」、第六章「サニ構文の歴史的展開——ミ語法の歴史的展開のために——」からなり、第二部は、第一章「諸方言の格標示体系に関する研究史——日本語の活格性をめぐって——」、第二章「格助詞ヲの標示域とその変化」、第三章「助詞シの標示域とその変化」、第四章「主節の格標示体系の可能性と第二部のまとめ」からなる。

第一部は、「X ヲ Y ミ」のミ語法について、従来の研究を見た上で、定説がない状況における問題点を挙げ(第一章)、形容詞を属性形容詞と非属性形容詞とに分類して、節レベルの「X ヲ Y ミ」が形容詞構文であり、語レベルの「Y ミ」が他の形容詞活用語尾と対応することを明らかにし(第二章)、ミ語法が「形容詞語幹+ム」型四段動詞を起源とするという説とは異なり、上代から平安時代にかけて、ミ語法の「形容詞語幹+ミ」が衰退形骸化し、また、「形容詞語幹+ム」型四段動詞(ム型動詞)、「形容詞語幹+ブ」型上二段動詞(ブ型動詞)、「形容詞語幹+ミ+ス」型サ変動詞(ミス型動詞)がム型動詞に収斂して行くという歴史的推移を明らかにし(第三章)、ミ語尾を形容詞の活用語尾の中に位置づけ(第四章)、それまでのまとめを述べて(第五章)、類似したサニ構文の歴史的展開について考察し、ミ語法を合わせた原因理由表現の歴史的展開の方向性について述べている(第六章)。

第二部は、ミ語法における助詞ヲに関する問題に対して、諸方言の格標示の問題点を挙げて活格性と見られるところを持つ方言について考察し(第一章)、上代語の格助詞ヲが現代共通語と異なることを述べ、上代語の格助詞ヲが非動作格、格助詞イが動作格であると述べ(第二章)、上代語の助詞シが主節で用いられる場合の非動作格性について述べ(第三章)、より古い格標示体系が活格性である可能性について述べている(第四章)。

## 論文審査の結果の要旨

上代を中心に多く見えるミ語法については、ミ語法の「形容詞語幹+ミ」とム型動詞とについて、ム型動詞を起源としてミ語法が成立するか、ミ語法がム型動詞化するかの両説があり、形容詞構文と見るか動詞構文と見るかも必ずしも明確ではなく、とりわけ、助詞ヲをどうとらえるかが難しく、諸説も多く定説がない状況である。本論文は、諸説を含む多くの関連する研究を踏まえて、また、上代・平安時代などのミ語法およびム型動詞などの多くの具体的な用例に基づき、新しいとらえ方を提示するものである。

本論文は、上代から平安時代にかけてミ語法が衰退形骸化するとともに、上代においてム型動詞・ブ型動詞・ミス型動詞が共存する状況に対して平安時代にム型動詞に収斂して行くという歴史的推移を明らかにし、そして、このミ語法の衰退形骸化とム型動詞への収斂とが連動するものであることについて述べていて、ム型動詞からミ語法が成立するととらえる従来の一方の説が成立困難であることを示している。まず、この点が、重要なことであり、評価される。

そして、形容詞を属性形容詞と非属性形容詞とに分類し、それぞれの用法を検討することにより、節レベルの「XヲYミ」が形容詞構文であり、語レベルの「Yミ」が他の形容詞活用語尾と対応することを明らかにしている。この形容詞構文と見るべき点からも、これまでの諸説は大きく整理されることになり、重要なことであると言える。

また、ミ語法に類似した原因理由表現であるサニ構文の成立について、上代から室町時代への歴史的推移を考察することにより、従来の説より説得力のあるとらえ方を示していて、これも重要である。

その他、形容詞の活用の成立についても述べるところがあり、その中にミ語法を位置づけていて、注意されてよい。

一方、ミ語法を形容詞構文としてとらえる場合の問題点は、現代共通語では他動詞の目的格を表すところの助詞ヲをどのようにとらえるかであるが、申請者はこの点について、古代日本語の格標示体系が活格性である可能性を考えることによって解決しようとする。そして、その中で、助詞ヲ・イ、助詞シの上代の用法などについて検討していて、そのそれぞれはそれなりに評価されるが、諸方言の検討を含めた全体として、より古くに格標示体系が活格性である可能性を見るには未だ十分であるとは言いがたい。また、他に細かい問題のある点もある。

しかしながら、定説のない状況の中で従来の諸説を大きく整理すべき重要な内容を中心とする本論文は評価できるものである。助詞ヲ・イ・シなどに関する問題についてはさらに詳細な研究が期待される。申請者が本論文とは別に進めてきた原因理由表現に関する研究の進展も期待できる。

なお、2008年2月8日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上のようなので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。